

## 1 平成27年 水稲の作柄経過～紙一重の所で冷害を免れる！

### (1) 生育の推移

表1 作業期節等

年次	は 種			出芽期	本田耕起		移 植			収 穫		
	始	期	終		始	盛期	始	期	終	始	期	終
27年	4/19	4/22	4/26	4/27	5/ 2	5/ 6	5/19	5/23	5/28	9/25	10/1	10/11
平年	4/20	4/23	4/27	4/29	5/ 7	5/11	5/23	5/27	5/31	9/16	9/24	10/ 2
遅速	早1日	早1日	早1日	早2日	早5日	早5日	早4日	早4日	早3日	遅9日	遅7日	遅9日

① 本田準備：ほ場が良く乾き作業は順調

融雪が早まり、その後も好天で、ほ場が良く乾燥。耕起は平年より早く進みました。

② 苗質：極端な徒長・老化苗は少ない

出芽は良好で揃いも良く、その後も好天が続き順調に生長し、苗質は良好でした。

③ 本田初期：順調にスタートをきるも、直後に足踏み

移植期間は強風日が多く葉先枯

れも見られましたが好天に恵まれ活着は良好でした。

活着以降は一転して低温・寡照状態が続き、生育は停滞。

中でも深植えや水深が深い水田は分けつの発生が劣り、管理の差が初期茎数に大きな差となって現れました。

6月中旬に一時的に天候が回復しましたが、下旬から再び低温・寡照となり生育が停滞。幼穂形成期には遅れに転じました（平年より2日遅れ）。

④ 本田中期：一時は障害型不稔を覚悟したが、冷害危険期からの好天に救われる

前歴期間も低温・寡照に経過し不稔多発が懸念されましたが、冷害危険期に入ると一転して高温・多照に経過し、花粉形成障害は紙一重のところで回避されました。

しかし、長期にわたる低温の影響で生育の遅れは拡大しました（止葉期5日遅れ）。

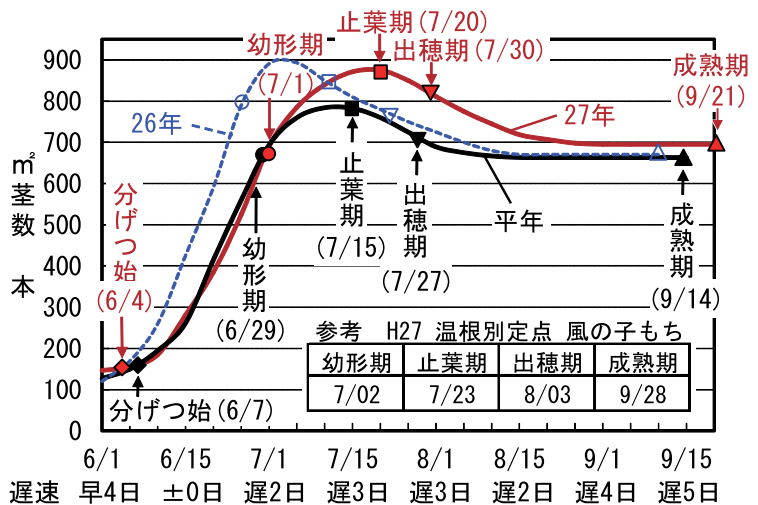


図1 茎数と生育期節の推移(1市2町展示ほ:きらら397)

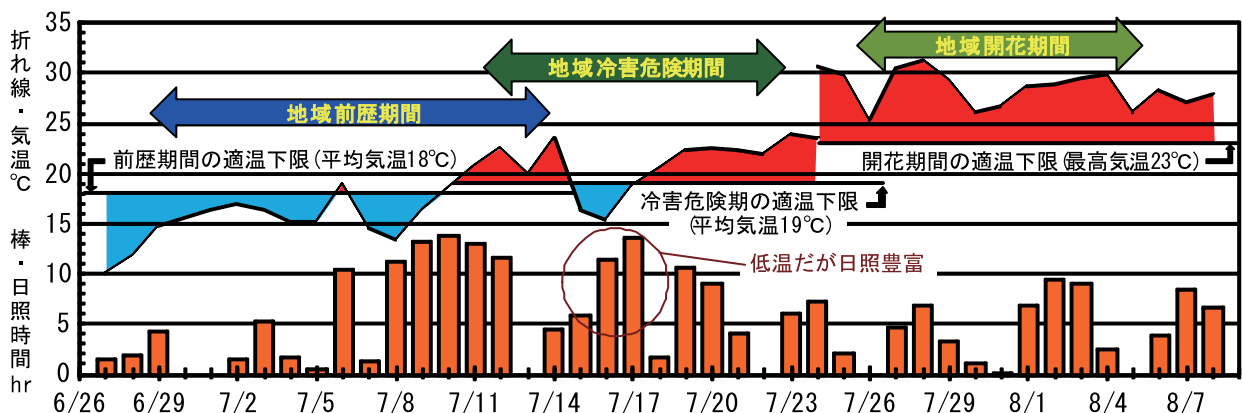


図2 前歴期間～開花期間の気温・日照時間の推移(土別アメダス)

初期茎数が抑制されたことに加えて、乾土効果による土壌窒素発現量の増加が重なり幼穂形成期以降も有効茎数が増え続け、穂数は平年より多いものの弱勢穂の割合が高くなりました。

⑤ 出穂・開花：受精は順調

その後も高温多照が続き出穂期で3日遅れにまで回復(ただし、もちは遅れ拡大)し開花・受精も良好でした。なお、夜温が高い時に出穂した茎の節間が伸びたためか、主茎(親穂)よりも、遅れ穂の先端の方が高い位置にある水田が多く見られました。

⑥ 登熟：前半順調・後半緩慢

前半は好天に恵まれ登熟は順調に進みました。  
後半は低温・寡照が長期間続き登熟は極めて緩慢で弱勢穂の整粒化が進まず、成熟期は平年より7日遅れました。断続的降雨により収穫も遅れましたが低温だったことが幸いし品質の低下はわずかでした。

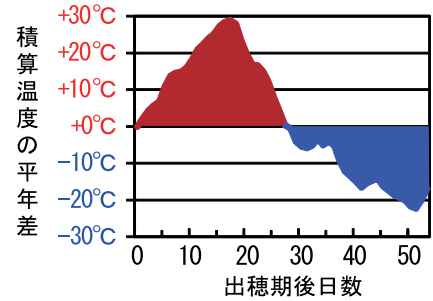


図3 出穂後の積算気温の推移

【2】 障害の状況

- ① いもち病・カメムシ～ともに発生が極めて少なく実害はありませんでした。
- ② 倒伏～ほ場整備後1年目・復元田・施肥重複地点を中心に、強風+強雨や刈り遅れなどの影響で日毎に増え、ここ近年では最も倒伏面積が多くなりました。

【3】 収量構成要素・収量・品質

- ① 展示ほの調査では、穂数は多いものの弱勢穂割合が高かったこともあり1穂粒数が少なく、m<sup>2</sup>総粒数は平年並でした。

稔実歩合は高くm<sup>2</sup>稔実粒数は平年より5%多くなりました。

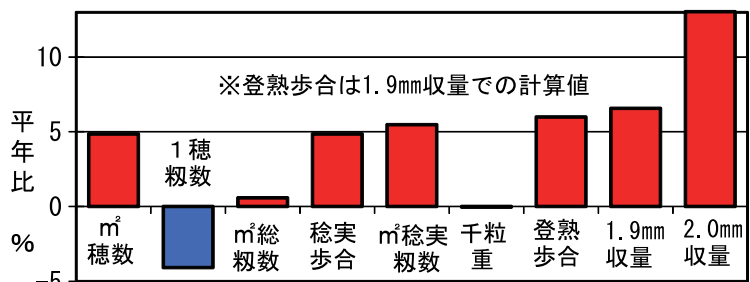


図4 収量構成要素等の平年対比(1市2町展示ほ:きらら397)

- ② 粒厚は厚く上米歩合が高く(図5)、収量は平年を上回り(大きい節目ほど高い-図4)、管内作況指数は104の「やや良」となりました。

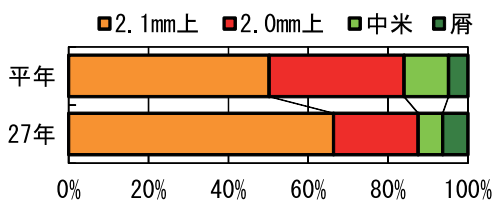


図5 粒厚別分布(1市2町展示ほ:きらら397)

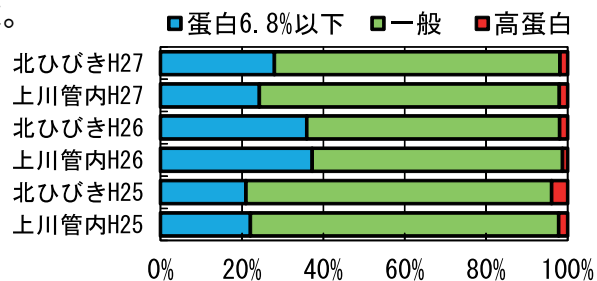


図6 蛋白区分別出荷割合(主要3品種+ゆめぴりか)

- ③ 蛋白値は全般に低く、低蛋白米出荷率は

は昨年には及ばないものの上川管内並を達成。食味面では、まずまずの結果でした。

- ④ 品質面では、26年より軽微とは言え27年も青米の混入が見られました。また、もち米では胴割れが目立ち、うるち米では、「ななつぼし」や「ゆめぴりか」に腹白粒等の白未熟粒が見られ、調製に手間と時間を要しました。一時は凶作も覚悟した中でほぼ平年並の出荷反収を確保できたとは言え、品質面では課題の残る年となりました。